

「和歌八重垣」をめぐる

古 田 東 朔

一

中世以来秘伝として相伝へられてきた「姉小路家手似葉伝」「手爾尾葉抄」「天爾遠者之大事」「歌道秘藏録」「春樹顯秘抄」等々の一群のてにをは研究書の内容も、江戸中期に至るに及び、中には公刊されるものが現はれた。寛文十三年（一六七三）の「歌道秘藏録」刊行、宝暦三年（一七五三）の「てにをは秘伝抄」の刊行などが、すなはちそれである。さうして、これらの秘伝書の刊行が、学問の自由討究の気運と相応じて、やがては本居宣長や富士谷成章の研究を将来するところの一つの源泉ともなつたものであることについては、既に従来説かれてゐる通りである。

しかしながら、これらの刊行に劣らない意義を有するものは、「和歌八重垣」の刊行である。この全七巻の書は元禄十三年（一七〇〇）有賀長伯によつて著はされたが、その内容は「和歌稽古の始めより五句の次第、会席の作法、禁制用捨、病の沙汰、題のよみかた、てにをは等に至るまで尽く是を記し又もろもろの詞を部類して註釈を加へたものである。そして、特にその中でも、巻二に収められてゐる「九哥のとまりの事、十一てにをはの事」の条が、てにをはに関して述べてゐる部分であり、それが今私が問題にしたいところである。

なほ、また、長伯には「春樹顯秘増抄」の著がある。「春樹顯秘抄」に増補を加へ、四十九条に分つて、てにをはに關し述べたものであるが、相伝の書であつたため、その制作の年代は明らかでない。しかし、その内容は「八重垣」に説くところと共通した点がある。

この小稿では、「顯秘増抄」その他を考慮に入れながら、「八重垣」の内容の成立について考へてみたいと思ふ。

二

山田孝雄博士は「國語学史」の中で、この両書の内容ならびに先後關係について、左のやうに述べられる。

さてその八重垣に説く所を春樹顯秘抄、歌道秘藏録に照して見るに、それらにありて八重垣に見えぬもの四五条あれど、又それらに見えずして八重垣に見ゆるもの九条あり。その九条のうち、「さへ」といふ条、「ちかひてにをは」といふものは春樹顯秘増抄の条目に見えねど、他の七条は増抄に見ゆる所なり。これによりて考ふるに、この八重垣に説く所はかの春樹顯秘増抄に説ける所よりして秘密にすべき部分又必要な部分を除きて抄出してこの書に載せたりといふべきものなるが、その増抄にも無く顯秘抄にも無く、秘藏録にも無き部分は増抄以後の新研究にして八重垣の爲に起草して加へたるものならむか。^(註一)
(「國語学史」
四六二—三頁)

断言されてゐるわけではないが、「八重垣」が「増抄」以後のものであらうかとされてゐる。さうして、「増抄」中から秘密にすべき部分、必要でない部分を除き、また以後の新研究を加へて

「八重垣」を起草したものではないかとの考へを述べられてゐるわけである。

内容の比較の上に立ち、論を進められてゐる点、教へられるところが多いが、しかし、私は山田博士の所論には全面的には従へないのである。むしろ、「増抄」の方が「八重垣」より以後に著はされたものではないかと考へるのであつて、以下その点について見ていきたい。

まづ、右の山田博士の論において「八重垣」に説かれてゐる「さへ」といふ条、「ちがひてにをは」といふ条が「増抄」には見えないといふことについてである。右の論究は「歌道秘蔵録」「春樹顯秘抄」に説くところを「八重垣」に比べられ、その中で「八重垣」にしかないものをさらに「増抄」と比べられたのであるが、ここでは「八重垣」と「増抄」とを直接に比べてみる。^(註二)その時の相違は、「八重垣」九、十一に述べてゐる条目で「増抄」に述べてゐないものは、九では「終の句より上へ心のかへる詠格」、十一では「かはといふてにをは」^(註三)「猶」「さへ」「ちがひてにをは」の五条目である。しかし、このうち「かはといふてにをは」に述べてゐる内容のものは、「増抄」では第七「かもしの条々」の中に、「か」と共に収められてゐるから、これは除外して考へられる。

さうして残つた四条のうち「猶」「さへ」は、「増抄」にはない。しかし、「たゞ、だに」は「増抄」に見えてゐるのであつて、これを「顯秘抄」と比較するときには、「八重垣」中の四語は「顯秘抄」の「入魂手爾葉の事」に述べるところを、さらに詳細に述べたものであるといふことができる。すなはち、

顯秘抄……第十九 入魂手爾葉の事(その中で「たゞ、猶、だに」等について述べる)

八重垣……たゞ、猶、だに、さへ

増抄……第十一 たにのてにはの事、第十二 たゞといふ事のやうであつて、「八重垣」の四語から「猶、さへ」を省いたのが「増抄」の二語であるとも考へられるのである。この点からは、必ずしも「八重垣」が「増抄」以後のものであるといふことはできない。

また、そのやうな考へをさらに助けるものは、「ちがひてにをは」の条目である。「顯秘抄」では、「おなし手爾葉を一首のうちにあまたをく事」の中の細目として「ちがひ手爾葉」について述べてゐるのであるが、「八重垣」はこれを「おなじてにをは」「ちがひてにをは」といふ二つの条目として立てた。「増抄」には前者の方の「おなじてには有事」の条目はあるが、後者の方の「ちがひてにをは」については、その条目もなければ、他の箇所でもその内容について述べてゐるところもない。つまり、その異同を示すと、

顯秘抄……第十 おなし手爾葉を一首のうちにあまたをく事(その中で「ちがひてにをは」はこについて述べる)

八重垣……おなじてにをは、ちがひてにをは

増抄……第四十三 おなじてには有事(「ちがひてにをは」について述べるところはない)

となるのである。この点から考へるとき、「顯秘抄」にも既に述べてゐる「ちがひてにをは」をば「増抄」で一度除き、それを「八重垣」でまたつけ加へたと見るよりは、「八重垣」で二つに分けた「おなじてにをは」「ちがひてにをは」のうち、後者の「ちがひてにをは」を除いたのが「増抄」であると見る方が、は

るかに妥当であらう。

さうして、「終の句より上へ心のかへる詠格」が「八重垣」において加へられてゐるのは、この書がてにをはを中心述べてたものではなく、和歌についての種々の面からする入門書であつたために、特に加へられた一条であると考えられることも許されよう。この条目は「顕秘抄」にもなければ、「増抄」にも、また見えない。

以上の点から考へるとき、その条目の増減の点からは、「増抄」が「八重垣」以前のものであるとは必ずしもいへない。「八重垣」に述べたところを更に整理し直し、増補を加へてゐるのが「増抄」であると考へられる余地の方が大きいのである。

ただし、勿論「増抄」の方が「八重垣」よりも詳細である。その条目も多く、条目内での説明も細部にわたつたものである。しかしながら、単にそのことだけでもつて「増抄」が「八重垣」よりも後に著はされたものであるといふことはできない。「増抄」に説くところを整理したものが「八重垣」であるとも考へられるからである。

しかし、「増抄」「八重垣」の条目の増減の度合を、「顕秘抄」と比べてみると、「増抄」と「顕秘抄」よりも、「八重垣」と「顕秘抄」の方が近いのである。次に減の場合の例として、右にあげた「八重垣」中の「かはといふてにをは」について見てみると、

顕秘抄……

第五 かの字の事
第六 かはといふ手爾葉の事

八重垣……

かもし
かはといふてにをは

増抄……第七 かもしの事(中に「かは」についてのことも収める)

となつてゐるのであつて、「顕秘抄」の条目をそのまま受けついでゐるのが「八重垣」であるといふことができる。

次に増の場合の例であるが、「や、やは」について述べてゐるところを、比べてみると、

顕秘抄……第四 やの字の事(中に「やは」についてのことも収める)

八重垣……やもし(中に「やは」についてのことも収める)

増抄……第十九 やもしの事
第二十 やはといふ事

となつてゐて、この点でも「顕秘抄」と「八重垣」の間の方が近い。(ただし、その他の条目においては、秘伝書としての制約にやはりよるためであらう、「八重垣」にはあげられず、「顕秘抄」と「増抄」に共通してゐるものがあることは勿論である。ここで問題にしてゐるのは、三書共通して採りあげてゐる条目や内容に關してのことである。)

三

以上の点から考へるとき、「八重垣」が「増抄」よりも前にできたものであらうと判断されるのであるが、なほ他の例について一考してみたい。それは、九州大学所蔵写本「手仁遠葉口伝」についてである。(註四)この書に述べる文章、証歌は「八重垣」と共通した点が多く、また、その証歌の数、及び条目はそれよりも多い。その多い部分は「顕秘抄」「増抄」と共通してゐる点がある。秘伝書としての性質によるものであらう。

今この「手仁遠葉口伝」も加へて右にもふれた「や」について述べてゐる細目をそれぞれあげてみると次頁の表の通りである。

春樹顯秘抄

第四 やの字の事

- (1) 口あひのや、
(2) よひいたすや、
(3) うたかふや、
(4) うたかひてすつるや、
(5) ねかひすつるや、
(6) ねかひのや、
(7) はかるや、
(8) めやと云手爾葉の歌に
— 略 —
(9) やはと云手爾葉の事
(10) 同じくやはと云手爾葉には
をやすめ字にして、やはと
いへるもあり
(11) またやはのはの字を略し
て、たゝやとはかりいへる
手爾葉あり
(12) とやと云手爾葉、又とひか
け手爾葉といへり
(13) 休めたるやの字あり

手仁遠葉口伝

や文字之事

- (1) 口合のや
(2) よひ出すや
(3) 疑のや
かた疑のや
かさね疑のや
(4) 疑すつるや
(5) ねかひすつるや
(6) ねかひのや
(7) をしはかるや
(8) めや
(9) やは
又やはといひて即座にかへ
らす下までいひくたして帰
る格有
(10) 亦やはと有てはの字休めた
る有
(11) 又えやはといへる類有
やといひてはを略しやはに
かよふ有
(12) とや
— 略 —
かへるや
はのや
やすめたるや
(13) 本の捨やとて有
すや
ましや

和歌八重垣

や

- (1) くちあひのや
(2) ねがひのや
(3) ねがひすつるや
(4) よびいだすや
(5) やすめたるや
(6) うたがひのや
(7) かたうたがひのや
(8) かせねうたがひのや
(9) うたがひすつるや
(10) かへるや
(11) をしはかるや
(12) めや
(13) やは
やといひてやはにかよふあ
り
(12) とや

春樹顯秘増抄

第十九 やもしの条々

- (1) くちあひのや
(2) よひいたすや
(3) うたかふや
かたうたかひのや
かせねうたかひのや
(4) うたかひすつるや
(5) ねかひすつるや
かへるや
(6) ねかひのや
(7) とやといふ
(8) はかるや
(9) やすめたるや
(10) いひすつるや
(11) めやといふはかへるてには
也
第二十 やはのてには
かへるやは
(12) やはといひてはの字をやす
めたるあり
(13) やはといふにやの字をやす
めてはといふ心によめるあ
り
(11) やはといふへきをはの字を
略してやとはかりいへる

(細目は、その項を立ててゐるか否かには必ずしもよらない。番号は「顕秘抄」の順に基準を置いて仮につけた。共通した番号が共通した細目である。傍線を施した箇所は「口伝」「八重垣」「増抄」の三書に共通した細目である。)

この表から見ると、細目排列の順序は「口伝」が「顕秘抄」に最も近くて、細目間に増加は行つてゐるが、その順序は全然変へてゐない。この点から考へると「口伝」或いはそれに近い内容のものが最も早く著はされて、それに次いで「八重垣」「増抄」と著はされたのではないかと考へられるのである。

更に、一つの証歌についての説明の異同を見てみる。「甲斐がねの」の歌の「か」についての説明のところである。^(註五)

春樹顯秘抄

しかと云手爾葉の事

思ふとち春の山辺に打むれてそこもいはぬ旅ねして、
ありあけの月もあかしの浦かせに浪はかりこそなると見え、
か、

甲斐かねはさやにも見しかけゝれなくよこほりふせる小夜の

中山

此等のしかは、大かた過去のしのてにはなり。又しをと云手爾葉にもかよひ侍り

過去のしの字に、かをやすめて、しかといへるもあり

又ありしか見しかと云ふを、ねかふ心に用る事も有り。よくよくあちはひ侍るへきと也

手仁遠葉口伝

又しかといへる或は

有明の月もあかしの浦風に浪はかりこそよると見えしか

昼のやうなるといふ心にかよふ也

甲斐かねをさやにも見しかけゝれなくよこほりふせる小夜の

中山

此か願の心にかよふ也

是等大かた過去のしの手にをは也またしをといふてにをはにもかよふ也過去のし文字にかを休めてしかといへるも有又有しかみしかといふを願の心に用る事も有よく味ひ侍るへし仕立による事也

和歌八重垣

がなとねがふ心に用るもあり
古今よみ人しらす

心かへする物にもかかた恋はくるしき物と人にしらせん
同

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの

中山

春樹顯秘増抄

ねかひのか

古今 かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこをりふせる

さやの中山

これらの例から見るときには、「顕秘抄」と「口伝」との間が非常に近いと判断されるのであつて、内容の点からいつても「口伝」が「八重垣」や「増抄」より前の形を示してゐることがうかがはれる。

ただ、それにしても前の表によると細目排列の順序は「口伝」と「増抄」が近く、(1)から(5)までは同一である。しかし、「口伝」と「八重垣」の条目のあげ方の順序は四箇所を除いた以外はすべ

て共通してゐるのであり、この点「八重垣」と「口伝」との近い関係がうかがはれるのである。しかもその説明の文章や証歌は相当似通つてゐる。「さへ」について述べてゐるところを示すと左の通りである。(―を除いた文が「八重垣」、(―)を除いた文が「口伝」である。「口伝」の朱書、また漢字かなの異同は省略する)

是も大様たにのてにをは(の次の格)におなし

(新古 俊成)
けふは又あやめのねさへかけそへて亂そ増る袖の白玉

袖の白玉にけふは又あやめのね(を)さへかけそへたと

也

(同 道信朝臣)
小夜更て声さへ寒きあしたつはいくへの霜か置増るらん

冬の夜のさむきはいふに反はすあしたつの声さへさむきと
也

又さへにてにをはをたしていへる格

(新古 城上是則)
影さへに今はときくのうつろふは波の底にも霜や置らん

「八重垣」はここまでで終つてゐるが、「口伝」の方は「亦さへもひゝきてもに用事有」「又もといひてさへに用手にをは有」の細目とその証歌をかがけてゐる。なほ、同じ細目の中の証歌の数も多い。この点「口伝」の有する内容がもとになつて、「八重垣」が制作されたであらうと思はれるのである。

さうして「八重垣」には「こそ」の条に、

こそといひてはれぬめけてへなとにてまれり
是はあけてねへめえれの通用也

とあり、この重複した文章はやはり何かから抜き書きするときにかうした形になつて表はれたのではないかと考へられることも、その判断を可能にさせる一つの根拠である。
(註七)

以上の点からして、私は「手仁遠葉口伝」或いはそれとほぼ内容の同じものが先にあつて、その中から特に「留り」と「単独のてにをは」といふ点を中心にして抜き出し、整理を行つたものが「八重垣」であると考へるのである。さうして、また、そのやうにして「八重垣」を刊行したために、「手仁遠葉口伝」の内容のものに、さらに補訂を行ひ、排列を直して著はしたものが「増抄」であらうと判断するのである。

四

ところで、この「八重垣」に見られる著しい特色は、それまでの秘伝書中に述べられてゐた内容を整理して示したことである。すなはち「歌のとまりの事」「てにをはの事」は、統一体としての一首の歌の終止形式と、それぞれ単独のてにをはとを区別し、整理したものに外ならない。かうした意識は「口伝」の中にも示されてゐたが、「八重垣」の方がさらに著しい。一方では、そのために「増抄」が凡例で述べてゐるやうな語句の呼応関係は明確な形で出ないで終つたけれども、かうした整理を行つてゐる点にも、従来の秘伝に対する新しい一つの態度が示されてゐると思ふのである。

「歌道秘蔵録」の刊行後、むしろ「顯秘抄」の内容によつたところの「八重垣」が出されたことには、別の意味での「或未知事情」が存してゐるかも知れない。しかし、秘伝の束縛にとらはれない点、そこには共通した精神の動きがある。それが、旧来の内容に基づいたものとはいへ、秩序と整理への意志が既に示されてゐるのである。「八重垣」の刊行部数は多かつたことであら

うし、従つて読者の範圍も広がつたことであらう。その与へた影響の大きかつたことを思はざるをえないのである。

(註一) 山田博士は「国語学史要」にも同様の見解を述べてゐられる。また、保科孝一氏も「新体国語学史」の中で理由は明記されないが同様の意味のことを述べてゐられる。

(註二) 「八重垣」と「増抄」の共通してゐる部分については、「国語学大系」第十四卷所収の「増抄」の箇所でもふれてある。しかし、それは落ちてゐる箇所もあつて十分ではない。なほ、ここで引用の「顯秘抄」「増抄」は「国語学大系」所収のものに従ふ。

(註三) この外、条目の名が異なつてゐるが内容は共通したものがある。「八重垣」九の「詞の外に心の残る詠格」は、「増抄」では第四十四「ことばを残して、上へかへりてことばること」となつてゐる。

(註四) 長雅、長伯の後高田清将といふ人から永田将之といふ人に伝へた旨、享和二年の奥書がある。

(註五) この歌はいはゆる「姉小路式」の中ではあげてゐるものと、あげてゐないものがある。

(註六) 「口伝」の順序と異なつてゐるのは「てどまり」「つゝどめ」だけである。また「口伝」には「詞の外に心の残る詠格」「終の句より上へ心のかへる詠格」はない。しかし、「口伝」には「八重垣」にない条目が、その数へ方によつて異なるが十項目余りある。

(註七) 「口伝」ではこの文章は「こその留りは五音第四の音あけてねへめえれの通用なり」とある。

(註八) 保科孝一氏「国語学小史」、長連恒氏「日本語学史」などでは、「八重垣」の内容はいはゆる「姉小路式」によつたものとされてゐる。しかし、一例をあげると、「かへる哉」「ふきながしの哉」は「顯秘抄」で加へられたが、「八重垣」もその両者をあげてゐるのであつて、「八重垣」はむしろ「顯秘抄」によつたと考へられる。

(註九) 龜田次郎氏「歌道秘藏録の刊本」(「立命館文学」第一卷第十一号五頁)

追記 図書の閲覧について種々お世話になつた福田良輔先生に謝意を表します。

——本学助教教授——